

# 「館山市における『地域に住民続けるDIY支援サービス』の開発」プロジェクト

代表者	山代 悟【教授】(建築学部 建築学科)
構成員	水谷 晃啓【准教授】(システム理工学部 環境システム学科) 岡野 道子【准教授】(建築学部 建築学科) 細川すず／塚田響／小野田朋葉(理工学研究科 建築学専攻)／上田妃奈乃／市原帆香／成岡桜／尾幡修平／大谷華／大澤弥央／大巻里桜／椎名果那美(建築学部 建築学科)／小林瑳和貴／伏江玲／相原陸人／大越久毅／鈴木悠途／寺田圭佑／海野開(システム理工学部環境システム学科)

## ■プロジェクトの概要

本プロジェクトは、令和元年台風被害を受けた千葉県館山市富崎地区にて、学生と地域が協働し「終わらない復興」を実践する活動である。2023年度は、地域に長年愛されてきた旅館跡地を、その歴史を継承しながらキャンプ場として再生。予算制約の中、旅館オーナーが持つ熟練の技能を最大限に活用した用途計画により、地域の拠点を復活させた。今年度は、移住促進や福祉対応改修を支える「DIY支援拠点」の設置運営体制を構築した。台風被害を逃れたの旅館一角に木材加工機ShopBotを導入し、デジタルファブリケーション技術を実装した拠点を整備。ハード・ソフト両面の課題を抽出することで、空き家活用に資する持続可能なビジネスモデルの構築と地域課題の解決を目指す。

## ■地域志向(COC)活動助成プロジェクトの成果

### 【教育】地域社会との協働を通じた実践的な設計・施工の習得

令和元年の台風被害以来、継続的に関わらせていただいている館山市富崎地区の皆様との交流を軸に進めてきた。5月の助成決定後、富崎館オーナーの多大なるご協力により広間への「ShopBot」設置が実現し、拠点の立ち上げから運用までの実務に携わった。12月に実施したワークショップでは、地域の景観や歴史を汲み取った「富崎におく椅子」の製作を通じ、デジタル技術を具体的な形にするプロセスを共有した。図面上での検討に留まらず、実際に現地の様子を感じながら設計を行い、さらに地域の方々から直接フィードバックをいただく過程は、本プロジェクトが次の段階へ進むための大きな一歩となった。



12月WSIにてグループ発表の様子

### 【研究】地域に開かれたデジタル加工拠点の運用モデルと可能性の検証

研究面では、住民の方々がこれからも住民続けるための基盤となる「DIY支援拠点」の在り方を模索した。地域に愛されてきた場所である富崎館の空間にデジタル技術を導入することで、単なる加工場に留まらない、地域に開かれたコミュニティスペースとしての役割を持たせることを期待した試みである。本年度は、機材を実際に稼働させる中で生じる運用上の課題について議論を重ねた。現在は今後は地元の建築関係者の方々为主体となって拠点を活用できる仕組みの構築を検討している。この地域におけるデジタル技術の活用が、新たな交流を生み出し、地域活性化に寄与する可能性について、持続可能な運営体制の観点から研究を進めている。



製作した「富崎におく椅子」

### 【社会貢献】技術交流を通じたコミュニティの維持と活性化

12月のワークショップでは、地域住民や富崎館オーナーに加え、地元の建築関係者を交えた技術交流の場を設けた。学生が製作した椅子をお披露目するとともに、建築関係者が将来的なユーザーとして拠点を活用するための具体的な議論を行い、デジタル技術が地域の「住民続けるための道具」になり得ることを提示した。この活動は、地域に愛されてきた場所を、未来を支える多機能な交流拠点へとアップデートさせる一助となっている。今後は館山市役所や地元専門学校とも協力し、地元の建築従事者や地域おこし協力隊が主体となって、住民が自ら住環境を整えていける公的な支援体制の構築を目指す。地域愛着をもつ人口を維持し、その土地らしい暮らしが続く仕組みづくりに寄与したい。



製作中のSHOPBOTの様子

## 主なトピックス

### ■12月ワークショップ「富崎におく椅子」の展開プロセス

本年度は、数ヶ月にわたる準備期間を経て、デジタル技術を地域に実装する2泊3日の集中ワークショップ(WS)を実践した。

#### ・準備期間:地域理解と技術基盤の整備(7月~11月)

7月のまち歩きを通じた地域理解を深めると同時に、富崎館へのShopBot設置、事前講習、WSの段取りなど、デジタル加工を地域で運用するための環境整備と入念な準備を行った。

#### ・WS初日:デザインワークとモックアップ製作

4グループに分かれ、地域の文脈を反映した椅子のデザインを検討。レーザーカッターで1/4模型(モックアップ)を作成し、プレゼンテーションを通じて構造と意匠の精査を行った。

#### ・WS2日目:ShopBotによる原寸大製作と公開加工

前日の検証を基に、ShopBotを用いて実寸大の切り出し・組み立てを実施。地元の建築関係者や地域おこし協力隊の方々に実際の製作風景を公開し、デジタル加工機が地域でどのように活用できるかの具体的なイメージを共有した。

#### ・WS3日目:公開プレゼンテーションと成果共有

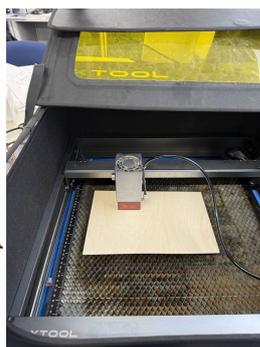
完成した椅子を披露する公開プレゼンテーションを開催しました。地域住民の方々にプロダクトを紹介し、座り心地を体感してもらうことで、今後の拠点活用の可能性を広く発信する貴重な場となった。



7月まち歩きの様子



モックアップ



レーザーカッター製作時



プレゼンテーションの様子

### ■地域主導のコミュニティ拠点へ

今後は学生主導から「地元の担い手」が主体となる運営体制への移行を目指します。富崎館を単なる工房ではなく、技術と人が交差するコミュニティの核として機能させていく。

#### 地元の建築関係者による実務への導入

地元の建築従事者が、現場での実測に基づいた補修パーツの切り出しや治具製作にShopBotを活用する体制を整えます。手加工では困難だった高度な微調整を地域内で完結させることで、迅速かつ質の高い住環境整備を可能にする。

#### 地域おこし協力隊との連携による運営の自律化

地域おこし協力隊が拠点の管理やワークショップの運営の担い手として、学生が不在の期間でも日常的に機材が稼働する仕組みを構築します。地元の担い手が「講師側」に回ることで、持続的な活用を目指す。

#### 住民が「住み続ける」ための相談・実践窓口

富崎館を、住民が自宅の「直したい」「変えたい」という思いを持ち込めるオープンな拠点として開放します。現地の寸法に合わせたオーダーメイドのDIY支援を通じて、住民自らが住まいの維持管理に主体的に関わる「共助」の関係を構築する。

#### 持続可能なビジネスモデルの構築

機材の維持管理費を賄うための利用ルールや、地元建築関係者との協業による収益モデルを検討します。デジタルファブリケーションをきっかけに地域の仕事づくりを支援し、若者の定住や移住促進にも寄与する持続可能な仕組みを確立する。